

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

スクリーンでロンドンの演劇を 2

狩野良規*

ナショナル・シアター・ライブが日本で見られるようになって早 5 年。昨夏、青山学院大学で「ナショナル・シアター・ライブ 5 周年記念シンポジウム」(2018 年 7 月 21 日)を開催した。3 時間半の長丁場、猛暑の日にもかかわらず約 350 名の聴衆が集まり、会場は終始熱気ムンムン。NT ライブのコアな観客が多いことに驚いた。

NT ライブ・イン・ジャパンの最初の 9 本については「スクリーンでロンドンの演劇を」(『ARTLET』No. 44, 慶応義塾大学アート・センター, 2015 年 9 月)で、すでに紹介した。今回はその続篇, 2015 年秋から 2018 年いっぱい日本で上映された 22 本についてコメントしてみたい。

『宝島』は, R. L. スティーヴンソン原作の, ご存じの冒険活劇。今売り出し中の女流演出家ポリー・フィンドレイは, 海賊と戦いながら宝探しをする主人公の少年ジムを, 人気急上昇の女優パツィー・フェランに演じさせた。へ～え, でも危ないよ, 何をわざわざトランスジェンダーして——と思ったが, この 25 歳の女優, うまい。役者に演技力があるから, 違和感がない。また, オリヴィエ劇場の大きな円形舞台に海賊船が立ち現れ, さらに宝島へ, 洞窟へと姿を変えるスペクタクル劇。舞台美術はリジー・クラチャン, これも女性。いや, わざわざ“女流”なんて冠をつける必要のない, 女性演劇人花盛りのロンドンの演劇界ではある。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

2016年は、ベネディクト・カンバーバッチ主演の『ハムレット』（バービカン劇場）で明けた。おっと、あまりの前評判にフライングして、前年11月に1晩かぎり、字幕なしで先行上映会があった。僕もロンドンで切符が買えずに見逃していた舞台、癪しゃくにさわったので見に行ったが、会場のTOHOシネマズ日本橋は超満員！2ヵ月待ってりゃ、字幕つきで見られるのに。

で、癪しゃくにさわっているから言うのだけれど、斬新さはない、ごくふつうの『ハムレット』だった。しかしやっぱりこの芝居、戯曲として十分面白い。独創的な演出はいらない。また、俳優たちも安定している。カンバーバッチもさることながら、僕はクロードディアス役のキーラン・ハインズがお好みだ。ごっつい顔をしている。悪役はこれくらい悪党面をしていないと。彼に焦点を合わせた演出の場面がいくつかある。前半は4幕3場、風で塵ちりが舞う中、クロードディアスの長ゼリフで終わる。むべなるかな。

『夜中に犬に起こった奇妙な事件』（NTコテスロー劇場）は、アスペルガー症候群の15歳の少年が殺された犬の犯人探しをするサスペンス仕立ての冒険談である。思考にグレイゾーンがない、イエスかノーかをはっきりさせないと気がすまない、それゆえに人と接するのが苦手なクリストファー（ルーク・トレックダウェイ）の内面を、プロジェクションマッピングでみごとに視覚化する。役者のパントマイムとコンピュータ操作の美術が上手に混合されている。おゝ、これぞ21世紀の演劇！少年目線で見ていると、しだいに両親や学校の先生の内情も伝わってきて、切なくも考えさせられる。

NTライブは今の今のロンドンの演劇状況を、日本にいながらにして体感させてくれ、心が躍る。オランダのイヴォ・ヴァン・ホーヴェ（トネールフループ・アムステルダム）は、ドーヴァー海峡を渡っても人気絶頂。彼の『橋からの眺め』は、なるほどアーサー・ミラーの1955年初演のリアリズム演劇を現代風に上演すると、こうなるのか、と。1950年代のニューヨークの貧民街を舞台にした移民の話。床は白、後方の壁は黒、箱型のミニマルなステージ、だがラストには真っ赤な血の雨が降る。ブルッ！昔の物語にあらず、移民は現代のヨーロッパが抱える大問題だと痛切に実感させてくれる。

ウエストエンドのウィンダムズ劇場からの中継だが、初演はヤング・ヴィイク。かの実験劇場の芸術監督デヴィッド・ランは、海外の演出家を積極的に起用して、既存のイギリス演劇とは異なるテイストの舞台を作らせる。

多作の大御所バーナード・ショーの作品の中でも代表作のひとつに数えられるのが『人と超人』（1903年作）である。しかしこの風習喜劇、舞台化がなかなか難しい。異性を追いかけるのは男の方と考えるのが当たり前だった時代に、ひねくれ者の巨匠は女が男を追いかける芝居を書いた。ショーらしい逆説に満ちた、読んで面白い戯曲だが、問題は全4幕中の第3幕、女たらしの権化たるドン・ファンが主人公タナーの夢の中で、地獄に現れるシーンである。毛色の違うその劇中劇と他の場面とのギャップをどう埋めるか。サイモン・ゴドウィンの演出は、慣れた手つきで全篇に統一感を漂わせ、スルスルスルッと舞台に乗せてしまう。地獄への上り下りは、お茶目にエレベーターなんか使っちゃって。いや恐れ入りました。タナー役はレイフ・ファインズ。

NTライブの創始者としても知られるニコラス・ハイトナーは、2015年3月にナショナル・シアターの芸術監督を退任したが、そのさよなら公演の演目を選んだのは、トム・ストッパードの新作『ハード・プロブレム』だった。人間の意識の問題を研究する科学者たちのお話。主人公のヒラリー（オリヴィア・ヴィノール）は心理学を学ぶ学生、15歳の時に子供を生み、里子に出した過去をもつ。結局、科学でどこまで人の心はわかるか、人を幸福にできるかと、よくあるテーマを、小難しい科学用語を並べて、観客に考えさせる議論劇に仕立てている。トム・ストッパード77歳、そうね、ちょっと落ちたかな。切符は数ヵ月前に完売したが、劇評は、ハイトナーよ、12年間よくNTの屋台骨を背負ってくれたが、この作品は最上の出来ではない、って論調が多かった。

オリヴィエ劇場で2007年に初演された『戦火の馬』は、マイケル・モーパールの同名児童小説が原作。第一次世界大戦に徴用された軍馬の話だが、新兵器の機関銃を前にして、馬たちはしだいに役に立たなくなっていく。実物大に近い木製のパペットを人形使いたちが巧みに操って、さながら生きている馬のよう。最初は酷評を覚悟したというのだが、なんのなんの、大ヒットを記録して、

助成金を減らされた時期のナショナル・シアターを資金面でも支えた。

2017年、『ハングメン』、僕はまったく予備知識なしで見に行き、狂喜乱舞した。いかにもイギリスらしいブラック・コメディ。無実を訴える死刑囚の刑を執行した絞首刑執行人ハリーは2年後、イングランドの田舎町でパブを経営している。折しも死刑の廃止が決まり、彼は新聞のインタビューを受ける。うらぶれたパブに集まる面々、怪しげなよそ者の青年、姿を消してしまう太った娘、実在の絞首刑執行人アルバート・ピアポイント……いずれも濃いキャラクターで一癖ある。やっぱり役者が達者。リアリズムの演技ができる俳優が真剣に演じて、初めてドタバタ喜劇は面白くなる。ラストで、日米の作品だったら、死体が生き返るだろうが、イギリスではそうはならない。見終わると、道徳的なレクチャーを受けるよりよほど死刑制度について考えさせられる。初演はフリンジの老舗ロイヤル・コート劇場。

戯曲はアイルランド人の両親のもとにロンドンで生まれたマーティン・マクドナーが書いた。彼は自らの脚本で映画『スリー・ビルボード』（2017年）を監督して、ハリウッドに殴りこんだ。あれもアンチ勧善懲悪、予定調和なしの、イギリスないしはアイルランド流のグロテスクな黒い喜劇だった。

ベルトルト・ブレヒトの『三文オペラ』、1928年初演の今や古典と呼べる作品を、ニコラス・ハイトナーの後を継いだNT芸術監督ルーファス・ノリスが演出した。ナチス前夜、ワイマール時代の暗黒街を題材にしたダークな音楽劇。だが、オリヴィエ劇場の大舞台では、ブレヒト流の異化効果もマルクス主義も影が薄く、ヴィッキー・モーティマーの大掛かりで今にも崩れそうな装置と俳優たちがコラボする。同時に、主人公の悪党メッキースに扮する人気者ロリー・キニアが、「お、おまえ歌も歌えるんだ」と証明した舞台でもある。さらに、メッキースをめぐる嫉妬心を燃やすポリー（ロザリー・クレイグ）とルーシー（デビー・クラップ）がデュエットする一場は圧巻。筋金入りのブレヒト研究者たちは、この21世紀のエンタメ芝居をどう評価するだろう。僕はロンドンで生の舞台を鑑賞、NTライブで再度見たが、カメラはもう少しロングの映像があってもよかったかな。

次はイギリスのスタンダード作品、テレンス・ラティガンの『深く青い海』(1952年初演)である。演出キャリー・クラックネル、主演ヘレン・マックロリー。階級の異なる男と駆け落ちしたが、案の定、満たされた生活を送れず、自殺を企てたヒロインのヘスター。彼女が息を吹き返す場面から始まり、その後の1日を追う。ラストはふたたび自殺を試みるか、それとも希望がなくても生きていこうと思いつくか。ラティガンの芝居は、これまで僕の心にヒットしなかった。ウェルメイドすぎて、なんか上手すぎて。だが、この作品はどこか重みが違う。装置はアパートのワンセットだけ、各部屋は壁が半透明になっていて、中が透けて見える。青い照明をあて、さながら深く青い海の底で人物たちが漂っているかのよう。ステキ。カメラも引きの映像が多くて、この中継は申し分なし。

そして、芝居を見た後に知った。ラティガンの元から離れていった同性の恋人が自殺している。まだゲイだとカミングアウトできなかった時代、彼は同性愛の痕跡を消した台本を書き、しかし生きていてほしかった元彼の鎮魂歌を奏でていた。なるほどね。

同性愛が絡む作品が続く。ハロルド・ピンターの『誰もいない国』は、ある夜、ロンドン郊外の老文学者の豪邸にみずぼらしい身なりのもうひとりの老人がやって来る。二人の爺さんが何者かわからない、最後まで正体不明。話はかみ合わず、^{ディスコミュニケーション}交流不全が終幕まで続く。いわばイギリス風不条理演劇。でも、パトリック・ステュアートとイアン・マッケランが演じると、これが実におかしい。どうやら老人たちは同性愛者のよう、それで互いに惹きつけられたらしく……

僕にとっては大の苦手のピンター劇を、意気盛んな御大二人が初めて心底面白く思わせてくれた。感激！芝居だけでなく、男ばかり4人の出演者と演出のショーン・マサイアスによる終演後のトークショーも異様な熱気に包まれた。こういうカジュアルで内容の濃い座談を僕もやってみたいなあ。

また、劇場で僕の隣に座ったごくふつうのお婆さんが、始終楽しそうに笑っていた。字幕も見えていない風、僕より英語も芝居もよくわかっているよう。NT

ライブは、日本にも目の肥えたお客さんがたくさんいる。そういう通の人たちと一緒に作品を鑑賞すると、とても幸せな気分になれる。

シェイクスピアの人気喜劇『お気に召すまま』は、宮廷から追放された面々が森の中で自由気ままな亡命生活を送る牧歌劇。そのハッピー・コメディに『宝島』のポリー・フィンドレイ（演出）、リジー・クラチャン（美術）、パッツィー・フェラン（シーリア役）、さらに『三文オペラ』のロザリー・クレイグ（ロザリンド役）が加わって取り組んだ。1幕の宮廷は現代的な企業のオフィス、そのデスクやraisやらが上方に吊り上げられると、一気に無機質なアーデンの森に変貌する。女性陣が21世紀の大劇場の舞台に新風を吹き込んでいる。ご同慶。

1963年に創設されたナショナル・シアターの半世紀の歴史の中で、これほどおバかな笑劇はないだろう。『一人の男と二人の主人』は、18世紀のコンメディア・デラルテの劇作家カルロ・ゴルドーニによる『二人の主人を一度に持つと』を、人気脚本家リチャード・ビーンが1963年の南イングランドのブライトンに設定を移し替えて描いた翻案劇。ヨーロッパ演劇史上でも屈指の即興喜劇にオマージュを捧げながら、原作の道化者アルレッキーノばりの肉体芸と、そしてブラックなセリフで、3時間観客をずっと笑わせつづける。抱腹絶倒なんてステレオタイプのことばは使いたくないが、でもこの芝居は抱腹絶倒。けれども、演出のニコラス・ハイトナー曰く、「ただ笑ってもらうだけの喜劇の稽古は大変なんだ」——そうだろうな、天下の国立劇団が、こんな意味のないスラップスティック・コメディでもしコケたら、笑われるだけではすまないもの。

イヴォ・ヴァン・ホーヴェはNTのデビュー作に、イブセンの『ヘッダ・ガーブル』を選んだ。気位の高い有閑マダムの自己解放されぬ、悶々とした内面をえぐり出す、ご存じの近代劇。シェイクスピア劇を戯曲の設定した時代と場所のまま上演しないのは今や当たり前だが、アーサー・ミラーもイブセンも現代的に舞台化する時代になった！ NTリトルトンの中劇場のステージにセティングされたのは、白くて四角い、まだ建築中なのかもしれないロフト風の部屋。このオランダの演出家、ガランとした空疎な空間がお好みのようだ。

人生の意味と目的がわからずに苦悶するヒロインは、しかしはたからすれば始末に負えないファム・ファタール。主演のルース・ウィルソンは「フェミニズムの劇」と述べているが、今日のどこにでもいそうな女性に普遍化して役作りすると、なんかこの芝居の魅力が薄れるんだよね。僕はもっと貴族的で高貴な悪女のヘッダが好きなんだけど。

NT ライブ・イン・ジャパンが5周年を迎える2018年は、『エンジェルズ・イン・アメリカ 第一部 至福千年紀が近づく』と『エンジェルズ・イン・アメリカ 第二部 ペレストロイカ』の2部作で幕を開けた。1部・2部合わせて7時間半(2回に分けて上映、後にシネ・リーブル池袋で通し上映)。映画は2時間が通り相場の時代に、よく映画館が上映を許可してくれた。

初演は1991年・92年、サンフランシスコの地方劇団がやっていた芝居をロンドンのナショナル・シアターが上演して大ヒット、その後ブロードウェイに凱旋帰国した。僕は当時、研究休暇をもらってイギリスに滞在中、大評判なのは知っていたが、現代アメリカのエイズの話、俗語も多いだろうなあ、長い芝居みたいだと、結局見ずじまいだった。政治、イデオロギー、人種、信仰、ドラッグ、同性愛、友情など、1980年代のアメリカが抱えていた諸問題をよくもこれだけ詰め込んだものだと感心する、ごった煮のダーク・ファンタジー。

エイズはそこ、不治の病だった。それに同性愛者がよくかかる病気でもあり、偏見が渦巻いていた。また、保守的なレーガン政権下で左右両派の対立も激化。戯曲を書いたトニー・クシュナーはゲイのユダヤ人、リベラル派、民主党支持者。彼は自身の信条を台本に込めてはばからない。そこが清々しく、このプレヒト流のディスカッション・ドラマに生氣を与えている。フロイトの影響も受けたとか。だから、夢もまた現実、と。80年代に起こった出来事だけでなく、人々が夢に見たこと、頭の中で考えたことが次々と描かれる。ついには怪しげな天使まで登場しちゃって。

実在の人物も散見されるフィクションである。保守派の辣腕弁護士ロイ・コーンは、かつてトランプの弁護士だったこともある。四半世紀を過ぎてからの再演は、トランプ政権の出現と今日のアメリカの分断された世相の反映であろう。

アメリカン・ドリーム

成功願望の成れの果ての夢幻劇は、ラストでベルリンの壁が崩壊し、時代が一瞬の光明に包まれるシーンで幕を閉じる。7時間半付き合ってから、それを見せられると、予定調和以上のハッピー・エンディングを味わえる。演出マリアン・エリオット、またアンドルー・ガーフィールド(プライアー役)をはじめ役者たちが達者。

トム・ストッパード作『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』は、1966年にエディンバラ演劇祭で初演され、翌年NTがオールド・ヴィク劇場で上演して大ブレイクした不条理演劇である。ハムレットの劇世界を端役の目で見たらどうなるか。二人はある日突然宮廷に呼び出され、王子のスパイをさせられ、あげくには自分たちの生の意味もわからず殺されてしまう。なるほど不条理。そのブラック・コメディをロンドン初演から50周年の記念に、オールド・ヴィク劇場で再演する試み。ローゼンクランツ役を、「ハリー・ポッター」シリーズでおなじみのダニエル・ラドクリフが演じている。彼は子役のイメージを払拭しようと、難しい芝居に挑戦しつづけている。舞台の出来は、そうねえ、あまり新鮮味はなかったかな。

次もスタンダード作品、1979年にNTオリヴィエ劇場で初演されて大ヒットしたピーター・シェイファー作『アマデウス』の再演である。天才モーツァルトに嫉妬するライバル、サリエリの葛藤劇は、モーツァルトの名曲を散りばめ、音楽劇としても楽しめる、だが、結局凡人は天才にはかなわないという、考えてみれば当たり前の痛烈な現実を突きつけてくる。今回のサリエリ役は、なんと黒人俳優のルシアン・ムサマティきょうび。今日のイギリスの芝居は、黒人が演じる必然性のない役柄に平気で黒人を配する。まあ、ロンドンの街を歩いていれば、多人種、多民族、それに多言語、多文化は当然の社会なのが痛感される。劇場だけ白人がブリティッシュ・イングリッシュを悠々と朗じる時代ではないのは、僕も頭ではわかっているのだが……

マイケル・ロングハーストが演出する公演は、オリヴィエ劇場の大ステージに若手オーケストラ20人を乗せ、彼ら彼女らが動き回りながら演奏し、俳優や歌手たちと渾然一体となってモーツァルトの世界を奏でるみごとなエンタメ芝

居——と、大劇場の最後列の天井桟敷から俯瞰^{ふかん}で見て堪能した作品を、帰国後NTライブで見直すと、ムサマティの顔の表情まで大きなスクリーンで鮮やかにくっきり、戯曲に内在する毒っ気たっぷりの文学的テーマがヒシと伝わってきた。

演劇は生で見るのが一番だと思っていたが、カメラが役者にフォーカスするNTライブは別腹で楽しめる。いいメディアが出現したと、心から感謝したくなる。

『イェルマ』はスペイン内戦中にフランコ軍に処刑されたガルシア・ロルカが1934年にものした作品。アンダルシアの、因習にがんじがらめの農村社会で、子供ができない石女^{うますめ}が苦悩する民衆劇。素朴で土臭く、しかし知的で、若書きなのに円熟している。

で、何度かコメントしたように、20世紀に書かれた戯曲はもはや“現代劇”というより“古典”ないしは“スタンダード作品”と呼ぶ方がよさそう。けれども僕にはまだ、現代がミレニアム以降を指すという感覚が今ひとつ乏しい。

そんな中で、オーストラリア人のサイモン・ストーンが演出するヤング・ヴィクトの『イェルマ』は、ガラスケースのような箱型の舞台上、今の今のロンドンに生きる女性の物語が展開する。ビリー・パイパー扮するヒロインは成功しているジャーナリスト、でも30代になってそろそろ子供が欲しくなり……この公演も、前出の『ヘッダ・ガーブレル』同様、主人公が現代的に普遍化されている。だが、その分前近代的な社会の縛りに埋没していく女性の解放を願うロルカの祈りが消えていて、素直に芝居の世界に入っていけなかった。もっとも、もし原作を読まずにNTライブを見ていたら、絶賛していたであろうが。

NTライブ、日本初お目見えのミュージカルは、ステイーヴン・ソンドハイム作詞・作曲のなつかしきブロードウェイ作品『フォリーズ』（1971年初演）である。取り壊しの決まったレビュー劇場に集う人々の昔日^{せきじつ}と現在の姿を追う。圧巻は主演のイメルダ・スタウトン。どう見たって美人ではない、体型もずんぐりむっくり、歌だってそんなにうまくない。それなのにセンターに立って、舞台を成立させてしまう。日本の演劇風土ではまずあり得ないことだ。デビュー

したころは、ジュディ・デンチの再来と言われた。たしかに！ 今やロンドンではミュージカルでもストレートプレイでも引っ張りだこの女優である。

ニコラス・ハイトナーはNT芸術監督の大役を果たした後も、なお意気盛ん。同僚だったニック・スターとともに新劇団「ロンドン・シアター・カンパニー」を立ち上げた。そのこけら落とし公演が、リチャード・ブーン(クライヴ・コールマンと共同脚本)の新作『ヤング・マルクス』。泣く子も黙る革命家も、若きころは質屋に妻の銀器を持ちこむ極貧の亡命者、女中と不倫におよび、息子に死なれ……日本で伝記といえは“偉人伝”の類いだ。野口英世が子供の時に火傷を治してもらい、それで医者になる志をたてたとか。そういう正しい心を育むお話は、しかし子供しか読まない。一方イギリスの伝記ものは、「あんな偉い人が、実はこんな変な人でした～」と偉人の皮をはぐ、毒のある大人用の物語が保守本流である。『ヤング・マルクス』もその手の芝居なのだが、ブーンの脚本はコミカルで甘口で、どうも『一人の男と二人の主人』のようなパンチに欠ける。主演のロリー・キニアがだんだんマルクスに見えてくるのは、容姿のせいかな、それとも彼の演技力のなせる業か。

ニコラス・ハイトナーらが新劇団の本拠地として建てたブリッジ・シアターは、ウエストエンドの古色蒼然たる劇場とは異なり、実に近代的。外見だけでなく、可動式の舞台も、いかにも演劇人たちの使い勝手がよさそう。どこぞの国の建築家主導の劇場とは大違い。

で、『ヤング・マルクス』の時はごくふつうの回り舞台だったのが、第2弾『ジュリアス・シーザー』では、なんと舞台がない。劇場に入ると、1階はバスケットボールかバレーボールの試合でもやりそうなアリーナ。そこにロックバンドが入り、開幕前からガンガンの音響で歌っている。ビールやナッツなども売られ、ほほう、アメリカの大統領選挙の党大会を模しているわけだ。マーク・アントニーはアジテーター、赤い野球帽をかぶって登場するシーザーは、ランプもどきのポピュリスト。むろん、アリーナの安価なチケットを買った観客がローマの群衆役だ。こういう芝居は一步間違うとアイデア倒れになるのだが、そこは現代的シェイクスピア沙翁劇上演の第一人者、ニコラス・ハイトナー。名匠はシェイ

スクリーンでロンドンの演劇を2

クスピアの古代ローマ劇に、民衆に迎合して権力を掌握する独裁者と、民衆の心をつかめぬ知識人たちの虚々実々を読み解いた。なるほど、古典劇の現代化とは見た目だけではない、今日に通じる普遍性を戯曲から抽出し、それを我々に痛烈に実感させてくれる芝居のことだ。ベン・ウィショ어가ブルータスに扮してさすがの演技、またキャシアス役の女優ミシェル・フェアリーが好演。

ということで、人種も民族もジェンダーもグチャグチャに混ざった、古典劇と現代劇がくんずほぐれつ、古い芝居も現代を照射して21世紀を主張し、伝統を保存するどころか片っ端からぶっ壊す、旺盛な反逆心を舞台にぶつけ、時には大コケする、そんな続々と繰り出される驚きの舞台を嬉々として楽しんでいる観客が大勢いるロンドンの演劇界、その中から選りすぐった秀作を日本にいながらにして見せてくれるNTライブ！ いいじゃないか。

この寸評集、to be continued でございます。(2019年1月 脱稿)

[NT Live in Japan: TOHO CINEMAS]

2015年

5. 『宝島』(9月): *Treasure Island*, NT Olivier 2015, 原作 R.L. スティーヴンソン, 脚本ブリオニー・ラヴェリー, 演出ポリー・フィンドレイ, 出演パッツィー・フェラン, アーサー・ダーヴィル
6. 『オセロ』(10月, アンコール)
7. 『リア王』(11月, アンコール)

2016年

1. 『ハムレット』(1月): *Hamlet*, Barbican Theatre 2015, 作 W. シェイクスピア, 演出リンゼイ・ターナー, 出演ベネディクト・カンバーバッチ, キーラン・ハインズ, コブナ・ホールドブルック・スミス
2. 『夜中に犬に起こった奇妙な事件』(2月): *The Curious Incident of the Dog in the Night-Time*, NT Cottesloe 2012, 原作マーク・ハットン, 脚本サイモ

ン・ステイーヴンス, 演出マリアン・エリオット, 出演ルーク・トレッドハウエイ

3. 『橋からの眺め』(4月): *A View from the Bridge*, Wyndham's Theatre 2015 (初演 Young Vic 2014), 作アーサー・ミラー, 演出イヴォ・ヴァン・ホーヴェ, 出演マーク・ストロング
4. 『人と超人』(7月): *Man and Superman*, NT Lyttelton 2015, 作ジョージ・バーナード・ショー, 演出サイモン・ゴドウィン, 出演レイフ・ファインズ
5. 『ハード・プロブレム』(9月): *The Hard Problem*, NT Dorfman 2015, 作トム・ストップpard, 演出ニコラス・ハイトナー, 出演オリヴィア・ヴィノール
6. 『戦火の馬』(11月): *War Horse*, New London Theatre 2014 (初演 NT Olivier 2007), 原作マイケル・モーパーゴ, 脚本ニック・スタフォード, 演出マリアン・エリオット, トム・モリス

2017年

1. 『ハンゲメン』(4月): *Hangmen*, Wyndham's Theatre 2016 (初演 Royal Court Theatre 2015), 作マーティン・マクドナー, 演出マシュー・ダンスター, 出演デヴィッド・モリシー, ジョニー・フリン
2. 『三文オペラ』(6月): *The Threepenny Opera*, NT Olivier 2016, 脚本ベルトルト・ブレヒト, 音楽クルト・ヴァイル, 演出ルーファス・ノリス, 出演ロリー・キニア, ロザリー・クレイグ, デビー・クラップ
3. 『深く青い海』(7月): *The Deep Blue Sea*, NT Lyttelton 2016, 作テレンス・ラティガン, 演出キャリー・クラックネル, 出演ヘレン・マックロリー
4. 『誰もいない国』(9月): *No Man's Land*, Wyndham's Theatre 2016, 作ハロルド・ピンター, 演出ショーン・マサイアス, 出演パトリック・ステュアート, イアン・マッケラン, オーウェン・ティール
5. 『お気に召すまま』(10月): *As You Like It*, NT Olivier, 2015, 作W.シェ

スクリーンでロンドンの演劇を2

イクスピア, 演出ポリー・フィンドレイ, 美術リジー・クラチャン, 出演ロザリー・クレイグ, パッツィー・フェラン

6. 『一人の男と二人の主人』(11月): *One Man, Two Guvvners*, NT Lyttelton 2011, 原作カルロ・ゴルドーニ, 脚本リチャード・ビーン, 演出ニコラス・ハイトナー, 出演ジェームズ・コーデン, オリヴァー・クリス, トム・エッデン
7. 『ヘッダ・ガーブレル』(12月): *Hedda Gabler*, NT Lyttelton 2017 (初日2016), 作ヘンリック・イブセン, 上演台本パトリック・マーバー, 演出イヴォ・ヴァン・ホーヴェ, 美術・照明ヤン・ヴァースウエイヴェルド, 出演ルース・ウィルソン

2018年

1. 『エンジェルス・イン・アメリカ 第一部 至福千年紀が近づく』(2月): *Angels in America Part 1: Millennium Approaches*, NT Lyttelton 2017, 作トニー・クシュナー, 演出マリアン・エリオット, 出演アンドルー・ガーフィールド, ネイサン・レイン
2. 『エンジェルス・イン・アメリカ 第二部 ペレストロイカ』(3月): *Angels in America Part 2: Perestroika*, NT Lyttelton 2017, 作トニー・クシュナー, 演出マリアン・エリオット, 出演アンドルー・ガーフィールド, ネイサン・レイン
3. 『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』(5月): *Rosencrantz & Guildenstern Are Dead*, Old Vic 2017, 作トム・ストッパード, 演出デヴィッド・ルヴォー, 出演ダニエル・ラドクリフ, ジョシユア・マグワイア, デヴィッド・ハイグ
4. 『アマデウス』(7月): *Amadeus*, NT Olivier 2017 (初日2016), 作ピーター・シェイファー, 演出マイケル・ロングハースト, 出演ルシアン・ムサマティ, アダム・ギレン, トム・エッデン
5. 『イエルマ』(9月): *Yerma*, Young Vic 2017, 作フェデリコ・ガルシア・

- ロルカ, 上演台本・演出サイモン・ストーン, 出演ビリー・パイパー
6. 『フォリーズ』(10月): *Follies*, NT Olivier 2017, 脚本ジェームズ・ゴードマン, 音楽スティーヴン・ソンドハイム, 演出ドミニク・クック, 出演イメルダ・スタウントン, トレイシー・ベネット
 7. 『ヤング・マルクス』(11月): *Young Marx*, Bridge Theatre 2017, 作りチャード・ビーン, クライヴ・コールマン, 演出ニコラス・ハイトナー, 出演ロリー・キニア, オリヴァー・クリス
 8. 『ジュリアス・シーザー』(11月): *Julius Caesar*, Bridge Theatre 2018, 作W.シェイクスピア, 演出ニコラス・ハイトナー, 出演ベン・ウィショー, デヴィッド・モリシー, デヴィッド・カルダー, ミシェル・フェアリー